

ヴィクラマ王の冒険—*Vikramacarita* 簡略版 訳注（二）—

堀 田 和 義

はじめに

本稿は、古代の伝説的な英雄ヴィクラマ王の事績を扱った *Vikramacarita*（ヴィクラマ王の冒険）の第十六話から第三十二話、および結びの部分の和訳である。*Vikramacarita* の概要、導入部の物語、および第一話から第十五話までの和訳は、堀田二〇一九を参照していただきたい。

翻訳に際しては、堀田二〇一九と同様、Edgerton による批判校訂本 (Edgerton 1926b) を底本とし、Edgerton 1926a と Törzsök 2007 という二種類の英訳を参考にした。他にも、英訳として Haksar 1998 を入手したが、これは特定の版の翻訳ではなく、様々な版の内容を組み合わせた特殊なものであるため、参照するだけにとどめた。

また、章の並べ方も、堀田二〇一九と同様、オリジナル版の順序に並べ替えた Edgerton 1926b のものではない。

く、Tōzōk 2007 のように簡略版の写本通りの順序に従った」。

【凡例】

一、ヴィクラマ王の名前は、原文では、Vikrama, Vikramasena, Vikramāditya, Vikramārka などの様々な表現が見られるが、翻訳においてはすべて「ヴィクラマ王」で統一した。他にも *epithet* などは、文脈の理解を妨げないような名前に変えて訳し、注に原語とその意味を記した。

二、翻訳においては、日本語としての読みやすさを考慮して、底本における文の切り方には必ずしも従わなかった。また、必要に応じて最低限の言葉を補った箇所がある（逆に省略した箇所もある）が、読みやすさを考慮して、インド学で多用される「*—*」の使用は避けた。

三、詩節は二字下げにし、詩節の末尾に全体での通し番号を付した^二。

訳 注

第十六話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

「もし春の礼拝を行えば、王国の障害がなくなるだろう」という理由で、王は春の礼拝のための準備をさせました。ヴェーダや教典に通じたバラモン、王家の系譜に通じた吟遊詩人、音楽書に記されたことを体現した^三演劇の師たちを呼び、美しい集会用の小屋を建てさせました。そして、宝石を散りばめた玉座を飾り、七柱の母なる神々^四やシヴァ^五をはじめとする神々の像を設置した後、多くの花を用いて礼拝を行いました。

「これによりシヴァ^六が満足して下さいますように。」

このように言って、王は布施を行いました。

世間の人々はみな幸せになり、苦しんでいる人はいなくなりました。そして、あるバラモンが王を祝福したところ、王は彼に八千万の金貨を与えました。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座ることができます。」

第十七話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、ヴィクラマ王の吟遊詩人が他の王国^七へ行つて、王を称え始めました。すると、その国の王が尋ねました。

「人々はどうしてヴィクラマ王を称えるのか。」

吟遊詩人は答えました。

「王様、ヴィクラマ王ほど度量が大きく、勇敢で、勇ましい者はいないからです。」

すると、その王はひとりの偉大な行者を祭式に呼んで、妖精の崇拜を始めました。そして、ゴマ油の入った釜が熱せられると、王はその中に自らを捧げました。妖精は満足し、喜んで、彼の身体を元通りにしました。

王は言いました^八。

「日没まで、私の七つの宮殿を黄金で満たして下さい。」

このようにして、王は日没まで布施を行い、毎日、身体を火に投げ込んだら、繰り返し宮殿の中に黄金を得て、再び布施をしました。

すると、そのことに興味を持って、ヴィクラマ王もその町へ行きました。そして、すべてを目にすると、自らを釜の中に投げ込みました。妖精は満足し、ヴィクラマ王は生き返りました。妖精は喜んで言いました。

「王よ、望みの物を選び取りなさい。」

「女神様、この王は、毎日、身体を投げ込んでいますが、それを止めさせて下さい。彼の七つの宮殿を常に黄金で満たし、使っても不足することがないようにして下さい。」

このように望みの物を乞うと、王は自分の都へ帰って行きました。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座ることができます。」

第十八話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、ひとりの異邦人がやって来て、王に次のような報告をしました。

「王様、海辺にあるシヴァ寺院の近くに美しい湖があり、その真ん中に黄金の柱があります。柱の上には素晴らしい玉座があつて、太陽が昇ると姿を現します。そして、太陽が昇るにつれて玉座も上昇し、正午になる

とその玉座と太陽が対面します。午後に太陽が傾くとそれも退き、太陽が沈むと水中に潜るのです。」

このような報告を聞くと、王は魔法の靴^九を履いて出かけ、その湖で休息をとりました。そして、夜明けに水中から柱が姿を現したので、王はその柱に座りました。柱が上昇するにつれて王は太陽光線によつて焼かれ、肉の塊のようになってしまいました。

そこで、対面した太陽が尋ねました。

「王よ、なぜあなたはここへやつて来たのですか。」

王は答えました。

「あなたに会うためであつて、他に望みはありません。」

すると、太陽は満足して、王に一对の耳飾りを与えて言いました。

「王よ、これらは望んだ通りに願望を叶えてくれます。」

そして、太陽に暇乞いを許された^{二〇}。王が柱から降りると、神の信者たちが香と灯明による神への礼拝を中断して、王に祝福の言葉をかけました。

そこで、王は尋ねました。

「ヴィクラマは他国の者であり、あなた方はこの国の出身です。どうして祝福の言葉をかけてくれるのですか。」

彼らは答えました。

「決意の固い方々がこの場所から富を得て、それを二倍から四倍にした後に神へ信愛を捧げることにより、私たちは生きていくことができます。そのようなわけで、ヴィクラマ王を祝福するのです。」

以上のことを聞くと、王は一对の耳飾りを神の信者たちにあげてしまいました。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座することができます。」

第十九話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、王は狩猟を楽しむために出かけました。そして、好奇心を満足させて^二、正午に再び都へ向けて出発したところ、大きな猪を見かけました。

王がその後を追うと、猪は森の中に入りました。王はただ一人で付いて行き、ある洞穴を見つけました。そして、馬から降りて洞穴に入った後、地底界^三に至り、神々しい王宮を目にしました。

王宮内の玉座にはバリが見えました。両者は互いに息災を尋ね、抱擁した後、質問を交わしました。そして、バリが王に妙薬と不老長寿の薬を与えると、王は洞穴から出て行きました。帰りの道では、あるバラモンの父子が王に祝福の言葉をかけました。

そこで、王は言いました。

「私は二つのものを持っています。一方により、新しい身体を得ることができ、もう一方により、黄金を得ることが出来ます。二つの中から、好きな方をお取り下さい。」

すると、父親は身体をもたらす方を、息子は黄金をもたらす方を求めました。このようにして、両者の間に諍いが生じました。彼らの諍いを目にとると、王は二つともあげてしまいました。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座ることができます。」

第二十話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、王が大地を散策して多くの町や聖地へ行き、ある町のシヴァ寺院で神像を拝んだ後、少しの間、そこに座っていました。

すると、そこへ三人の異邦人がやって来て座り、お互いに話し始めました。

「私たちは地上にある多くの聖地と非常に驚くべきことを見ました。しかし、偉大な聖者トリカラナータの山へ行っても、彼に会うことができませんでした。」

別の一人が言いました。

「彼に会うことは困難です。その道に行く者たちには魔法の投げ縄が絡まり^{一三}、身体が減びてしまいます。このようであるのに、何ができるでしょうか。商品が失われてしまったら、どんな商売ができるでしょうか。次のように言われています——

実りのない仕事、不幸に終わる仕事、失うものと得るものが等しい仕事^{一四}、不可能な仕事。賢者はこれらに着手すべきではない。」^{（十一）}

このように言うと、彼らは沈黙しました。

以上の会話を聞くと、トリカラナータに会うために、王は出発しました。道では魔法の投げ縄が絡みつい

てきましたが、王はどうか目的地にたどり着き、トリカーラナータに会うことができました。そして、魔法の投げ縄から逃れた王が敬礼すると、トリカーラナータは祝福して言いました。

「王様、なぜ苦勞してここにやって来たのですか。とてもお疲れでしょう。」

王は答えました。

「あなたに会ったことで疲れがとれました。私は幸せです。」

すると、偉大な聖者は満足して、衣と棒状の魔法の剣、白墨を与えました。

「右手に持ったこの白墨で印を付けられた者の軍隊は息を吹き返します。左手で書けば敵の軍隊を滅ぼします。衣は願いを叶えてくれます。以上がこれらの物の力です^{一五}。」

そして、出発した王は、帰りの道でひとりの尊い者に出会い、尋ねました。

「あなたは誰ですか。」

彼は答えました。

「私の王国は後継者たちに奪われてしまい、殺されそうになったため、逃げてきました。今や、私を受け入れてくれるような者がいるでしょうか。」

このように言って、彼は悲しみました。

すると、王は「恐れなくてもよろしい」と言って、それらのものを彼にあげてしまいました。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座することができます。」

第二十二話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、ひとりの異邦人が王のもとにやって来て言いました。

「王様、私は興味深いことを目にしました。ヨーギニープラという町があり、そこにはカーティヤーヤニの神殿があります。私はそこで一夜を過ごしました。すると、真夜中に湖の中から八人の神々しい乙女たちが現れ、十六種類の方法で女神に礼拝し、踊り、歌った後に、水の中に入って行きました。私は、以上のようなことを目にしました。」

それを聞くと、王はその場所にある神殿に行きました。すると、真夜中に八人の乙女たちが女神に礼拝し、踊り、歌うなどした後、再び水の中に入って行きました。王もそれに従って入り、そこである神々しい宮殿を目にしました。そこでは、乙女たちが眼前にやって来て、王を歓待して言いました。

「王様、この場所を治めて下さい。」

王は答えました。

「私にはすでに王国があります。」

彼女たちは言いました。

「王様、私たちはあなたに満足しました。」

そこで、王は尋ねました。

「あなた方は誰ですか。」

彼女たちは答えました。

「私たちは八つの偉大な神通力です。」

このように言って、八つの宝石を王に与えて言いました。

「これは私たちの勝利の姿です。あなたの望むどのような神通力でも手に入れることができるでしょう。」

彼女たちがこのように言うと、王は再び水から出て行きました。帰りの道では、あるバラモンが王を祝福して言いました。

「王様、何か食べ物を下さい。」

すると、王は八つの宝石をあげてしまいました。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座ることができます。」

第二十二話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、王は地方の習慣を視察しに行きました。そして、一人きりで道を歩いていると、ガンジス川の岸辺で悲しげな顔のバラモンを目にしました。そこで、王は尋ねました。

「おお、尊い方よ、どうして青ざめた顔をしているのですか。」

バラモンは答えました。

「王様、何と言ったらいのでしょうか。私の苦勞は無駄になり、果報がなくなってしまうました。他の山にカーマークシーという女神がおり、そこには洞穴があつて、水銀の入った瓶があります。その場所で宗教的実践を行うと、錬金術が習得できます。しかし、私は十二年にわたって実践したのですが、習得できませんでした。そのようなわけで物思いに耽っているのです。」

すると、王は言いました。

「行きましょう。その場所を見せて下さい。」

そして、二人とも日暮れ時にその場所にやって来て、休息をとりました。そこで、女神は王に夢を見させました。

「王よ、もしここで人間を供物として捧げれば、洞穴の扉が開いて、錬金術が習得できます。」それを聞くと、洞穴の扉に近付いて、王は言いました。

「ここにおられる女神は、どうぞ私の身体に満足して下さい。」

そして、頭を切り落とそうとすると、女神が目の前に現れて言いました。

「私は満足しました。望みの物を与えましょう。」

王は答えました。

「このバラモンに錬金術を授けて下さい。」

女神は同意し、扉を開けて言いました。

「バラモンよ、洞穴の扉は開きました。あなたは錬金術を習得するでしょう。」

すると、そのバラモンは錬金術を習得し、喜びました。王は自分の都へ帰って行きました。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座することができます。」

第二十三話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、ヴィクラマ王が王国を治めている時に、「水牛に乗って南方へ行く」という悪夢を見ました。そこで、翌朝、ヴェーダに通曉した者たちと占星術師たちに話したところ、彼らは答えました。

「牛、牡牛、象に乗ること、寺院、岩山の頂上、木に登ること、大便を塗ること、泣き叫ぶこと、死者、近付くべきでない女に近付くこと。これらは、夢の中では縁起の良いことです。」
十三

驢馬、水牛、熊、猿に乗ることは不吉なことです。白いものは、灰、綿、コヤスガイ、骨の集まりを除けば縁起の良いものであり、黒いものは、象、馬、牝牛、バラモンを除けば不吉なものです。したがって、王様、水牛に乗ることは何か不吉なことです。そこで、悪夢の影響を滅ぼすために、黄金をいくらか布施するべきで

す。」

それを聞くと、王は昼も夜も宝庫を開放して言いました。

「誰でも必要なだけ持つていくがよい。」

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座することができます。」

第二十四話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある町に、王からも敬われる裕福なひとりの商人がいました。彼は死期が近付くと、次のように考えました。

「私の息子たちは財産を求めて諍いを起こすだろう。そのため、この財産を分配しなければならない。」
そして、彼は銅製の箱を四つ作りました。一つ目には麦わら、二つ目には骨、三つ目には土塊、四つ目には

火の消えた石炭というように、四つの箱にこれらを入れて封をすると、息子たちに言いました。

「お前たちに対する私の愛情は一樣ではない。私が分割してお前たちに与えた物を受け取りなさい。」

このように言って、四つの箱を見せました。

すると、彼らは入れられた通りの物を目にしました。さらには、あらゆる人たちに見せましたが、誰も理解できませんでした。そして、ヴィクラマ王のもとへやって来ましたが、王にも分かりませんでした。その後、あちこちを彷徨っていると、ピータスターナにたどり着きました。そこで、シャールリヴァーハナ王は言いました。

「骨を手に入れた者は牛を、土塊を手に入れた者は土地を、石炭を手に入れた者は黄金を、麦わらを手に入れた者は穀物を受け取るべきである。」

その出来事を聞くと、ヴィクラマ王はシャールリヴァーハナ王を呼びましたが、彼は来ませんでした。

後に、ヴィクラマ王はピータスターナへ向けて進軍し、戦争が起きました^{二六}。シャールリヴァーハナ王がシェーシャ^{二七}を念じると、ヴィクラマ王の軍隊が多くの蛇に咬まれてしまいました。そこで、ヴィクラマ王は軍隊を生き返らせようと願って、ヴァースキ^{二八}を崇拝しました。すると、満足したヴァースキは不死の甘露の入った瓶を与えました。

その後、帰り道を行く王に、あるバラモンが祝福を与えると、王は言いました。

「おお、望みの物を乞うて下さい。」

彼は答えました。

「不死の甘露の入った瓶を下さい。」

王は尋ねました。

「あなたは誰ですか。」

彼は答えました。

「シャーリヴァーハナ王に派遣された者です。」

そこで、王は考え込みました。

「この者は敵が派遣した者であるが、与えると言ったのを反故にしてはならない。次のように言われている

浮世というのは、もとより中身の無いものであるが、言葉によつて中身の満ちたものとなる」^{一九}。言葉に
関して逸脱した者は誰でも、功德を失つてしまう。」^{二四}

このように言うと、不死の甘露の入った瓶をそのバラモンにあげてしまいました。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座ることができます。」

第二十五話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

かのヴィクラマ王が王国を治めている時に、ある占星術師がやって来て、王に祝福を与えました。すると、王は尋ねました。

「現在、惑星はどのような状態ですか。」

占星術師は答えました。

「王様、雨が少なくなるでしょう。次のように言われています——

もし土星^①がローヒニーの車を横切ったら、この世界では、インドラ^②は十二年にわたって大地に雨を降らせない。」（二十五）

そこで、王は尋ねました。

「何か対処法はありますか。」

占星術師は答えました。

「ヴァルナを喜ばせるための儀礼、そしてインドラを喜ばせるための布施^三やバラモンの供応などという善業を行うべきです。」

すると、王はチャンディカーの寺院で供応を受けるに相応しい人々やバラモン、鬼霊たちに礼拝し、満足させました。それでも雨は降りませんでした。王が悲嘆に暮れていると、天の声が言いました。

「人肉によって六十四の妖精を満足させれば、神が雨を降らせるでしょう。」

王は考えました。

「水がなくて苦しんでいるすべての人が、もし一人の身体で幸せになるならば、一体、それ以上のことがあるだろうか。」

このように考えて、女神の面前で自分の頭を切り落とそうとすると、女神が目の前に現れて、手を押さえて言いました。

「望みの物を選び取りなさい。」

王は答えました。

「雨を降らせて、人々を幸せにして下さい。」

女神が「よろしい」と言うと、雨が降り、無限の穀物が実りました。そして、王は自分の都へ帰って行きました。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座することができます。」

第二十六話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、王は天界にあるインドラの集会場へ行きました。神々やガンダルヴァなども敬意を表するためにやってきました。すると、その場で次のような質問が生じました。

「人間界には、ヴィクラマ王よりも勇敢で、度量の大きい者はいないのだろうか。」

そして、インドラが如意牛を見ると、如意牛は言いました。

「何か変わったことでもありますか。」

インドラは答えました。

「地上へ行つて、ヴィクラマ王の勇敢さを確かめて来なさい。」

そこで、如意牛は地上世界へ行きました。ヴィクラマ王も国内を散策して、都へ帰つて来るつもりでした。その時、森の中で、一頭の弱々しい年老いた牝牛が泥沼にはまっているのを目にしました。王は助け出そうとしましたが、牝牛は抜け出すことができませんでした。

やがて太陽が沈み、まもなく雲の塊が闇をもたらして、雨を降らせました。ちょうどそこへ一頭の虎がやって来ました。すると、王は自分の衣で牝牛を覆い、自らは裸のままでした。そして、太陽が昇ると、王の決意を目にして、牝牛が言葉を發しました。

「王様、私は満足しました。望みの物を選び取つて下さい。」

王は答えました。

「私には何も望みはありません。」

牝牛は言いました。

「もしあなたに必要な物がなければ、神のそばにるように、あなたのそばに留まりましょう。」

そして、王は牝牛とともに帰途につきました。すると、帰りの道で、あるバラモンが王を祝福して言いました。

「王様、食べ物下さい。」

そこで、王は如意牛をあげてしまいました。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座することができます。」

第二十七話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、王は大地を散策していて、ヨーギニープラにやって来ました。そこにあるマハーカーリカー寺院には、寺院の八つの窓によって美しい苦行林と美しい湖がありました。その場所の配列を見ると、少しの間、王は座っていました。

すると、上質の白檀や衣、装飾品によって飾られ、キンマを口に含み、そっくりな二人の男を伴ったある高貴な男がやって来て、窓のところに座りました。彼はただ滞在すると、再び立ち去って行きました。

王は「これは誰だろうか」と考えて、日没までその場所にいました。すると、同じその男が落胆した顔をし

て、羅刹^三のような姿で、下衣の縁を高く引き上げてやって来ました。そこで、王は尋ねました。

「おお、気高い方よ。日中、あなたは美しく、高貴な方に見えましたが、今はどうしてこのような状態になつてしまったのですか。」

彼は答えました。

「私の業（運命）は、このようなものなのです。」

王は尋ねました。

「あなたは誰なのですか。」

彼は答えました。

「私は博打打ちです。王様、私はサーリパラ、ソートウカンタ、チャトウランガ、カパルダカ、ウツチャリタムシュティ、ガターガタ、ダシヤチャトウシュカ、チーラニーヤ、ドゥーリカー」^四をすることができます。言葉や誓いはみな偽りであり、運命だけが真実です。」

王は尋ねました。

「もしのように分かっているならば、負け続けて^五、服まで取られてしまっているのに、どうしてあなたは博打を打つのですか。」

彼は答えました。

「王様、博打はインドラの境地や不死の甘露よりも好ましく、喜びの大きいものなのです。」

それを聞くと、王は微笑み、沈黙しました。すると、男は言いました。

「おお、友よ、もし私のために便宜を図ってくれるならば、私は幸運を引き寄せることができるでしょう。」
そこで、王は答えました。

「神が命じる通りにしましょう。」

このように両者が話している間に、二人の気高い人物が寺院にやって来て、お互いに次のような会話をしました。

「八柱のバイラヴァに身体の八つの部分の血を、カーリカーに喉の血を捧げるならば、それに満足した神々から望みの物が与えられます。」

それを聞くと、王は身体（二六）の八つの部分の血を八柱のバイラヴァに、喉の血をカーリカーに捧げました。すると、女神が言いました。

「王よ、私は満足しました。望みの物を選び取りなさい。」

王は答えました。

「もし満足されたならば、この博打打ちが負けないようにして下さい。」

女神は「そうしましょう」と言いました。すると、王は博打打ちに別れを告げて（二六）、帰って行きました。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座することができます。」

第二十八話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、王が異邦人に物語を求めたところ、彼は次のように答えました。

「王様、私は散策していたところ、道に迷ってしまいました。東方にシヨニタブラ^{二七}という名の町があり、そこにはマーンサプリヤー^{二八}という女神がいます。そこでは、誰でも心に願ったものを獲得するために、女神に男や夫婦を捧げることを誓い、願いが叶うと、買い取るか道行く人を捕まえるかして、女神に捧げるのです。その町にはそのような風習があるのですが、幸いにも私は逃げることができました。」

それを聞くと、王はその場所へ行き、女神の寺院を目にしました。そして、沐浴し、敬礼して女神を称えた後、そこに座りました。すると、様々な楽器の音^{二九}や歌、踊り、泣き叫ぶ声、金切声とともに、人々がやって来るのが見えました。

王は、憐れみに満たされて言いました。

「おお、女神には好ましいものが捧げられるべきですが、この者は弱々しく見えます。そこで、この者を解放して、栄養に満ちた私の身体で女神を満足させて下さい。」

このように言うと、その人を解放させ、死の歌や踊りの後で、自分の頭を切り落とそうとしました。すると、王の勇敢さに満足した女神が言いました。

「望みの物を選び取りなさい。」

そこで、王は答えました。

「人間の生贄を受け取らないで下さい。」

女神がそれを認めると、王は自分の都へ帰って行きました。

小像が言いました。

「王様、このように勇敢な者ならば、この玉座に座ることができます。」

第二十九話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、王が召使いに魔法の靴^{三〇}を履かせ、シヴァ^{三一}の礼拝のために、ヴァーラーナシーへと派遣しました。そして、彼が礼拝を終えて帰途についたところ、ある町にナラモーヒニー^{三二}という名の王女がいました。彼女を見た者は、誰でも夢中になってしまうというほどに、その姿は美しいものでした。

彼女を求める者は夜になると王宮の中へ入り、夜間にそこで殺され、朝には死んだ状態で外に放り出されました。夜間に何が起こっているのかは誰も知りませんが、次のような噂が流れていました。

「神々でさえ、その人間の女性を見ると夢中になり、死をも顧みないのだ。」

王の召使いはそのような事情を知ると、愛欲に苦しみながらも、死を怖れて都に戻り、王にナラモーヒニーの話を知らせました。

すると、王は、その召使いとともその町へ行き、ナラモーヒニーに会うと、その建物で休息をとりました。彼女は寝台で眠りましたが、王は起き上がり、手に剣を持って、柱の陰に隠れていました。

そして、真夜中になると、恐ろしい黒羅刹が寝台のそばへやって来ました。ナラモーヒニーが一人きりであるのを見て、羅刹が引き返そうとした時、王が遮りました。

「おい、卑しい者よ、どこへ行くのだ。私と対決しろ。」

そして、対決し、王が羅刹を倒しました。すると、ナラモーヒニーが姿を現して言いました。

「王様、あなたのおかげで呪いから解放されました。どれほどの人が私のために亡くなったことでしょう。」

あなたには恩返しできそうにありません。これから、私はあなたの言う通りにします。あなたの命じること何でもします。」

そこで、王は言いました。

「もし私の言う通りにするならば、ここにいる私の召使いに従いなさい。」
そして、その二人を結び付けると、王は自分の都へ帰って行きました。

小像は言いました。

「王様、このように勇敢な者ならば、この玉座に座ることができます。」

第二十話

再び小像は言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ある時、王のもとにひとりの奇術師がやって来て言いました。

「王様、私に少し機会を与えて下さい。」

王は「よろしい」と答えました。彼も「自分で奇術の道具を持って来ます」と言って、立ち去りました。すると、剣と盾を持ったキールティマツトという名のある者が、妻とともに王のもとにやって来て、自らの家柄に相応しい作法で敬礼して言いました。

「ヴィクラマ王よ、神々と悪魔との戦争が始まっています。神々はあなたを召喚するために私を派遣しました。そこで、私は神々を助けに行きます。あなたは高潔な王ですから、私が戻って来るまでの間、私の妻をあなた自身のもとで保護して下さい。すぐに戻って来ます。」

このように言うのと飛び上がって、天空へ行きました。彼が行くのをあらゆる人たちが見ていましたが、やがて見えなくなりました。

すると、空から叫び声が聞こえました。

「ここだ、ここ。そら、捕まえろ。そら、打て。」

そして、一瞬にして、傷を負ってバラバラになった死体が一体、見物人たちの目の前に落ちてきました。

そこで、キールティマツトの妻が言いました。

「王様、私の夫は、神々に奉仕して死んでしまいました。私は彼の後を追って、火の中に入ろうと思います。」

このように言って死ぬ準備を整えると、王は儀礼を行わせました。彼女は火の中に入り、人々はみな驚きま

した。
その時、宝石を散りばめた装身具を身につけ、美しい衣を纏ったひとりの男がやって来て、王に敬礼して言

いました。

「王様、神々と悪魔との戦争は終わり、神々が勝利しました。神々は衣と装身具を与えて、私を送り出しました。あなたのおかげで勝利を収めることができました。私の妻をお返し下さい。家に帰ろうと思います。」すると、王は沈黙していましたが、やがて答えました。

「あなたが戦争でバラバラになって落ちてきたので、あなたの妻は火の中に入ってしまった。」彼は笑って言いました。

「王様、あなたは賢明な方です。どうしてそのようなことを仰るのですか。夫が生きているのに、どうして火の中に入るといいますか。」

王の従者が答えました。

「勇者よ、まったくその通りのが起こったのです。」

そして、悲しみに飲み込まれている王を目にすると、奇術師は敬礼し、そこへ彼の妻がやって来ました。

「王様、私はあなたに奇術をお見せしたのです。」

そこで、王は満足して、彼に贈り物をしました。

八千万の黄金、九十三の重さの真珠、甘い香りを求める蜜蜂たちが群がる、怒りを抑制できない五十頭の象、三百頭の馬、諸芸に秀でた百人の遊女。パインドウの王により貢物としてもたらされたこれらの物が

奇術師に与えられました。(一六)

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座ることができます。」

第三十一話

再び小像が言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ヴィクラマ王は王国を治めていて、ある時、ヨーガ行者に満足して言いました。

「尊い方よ、望みの物を乞うて下さい。」

すると、彼は答えました。

「私は供犠を行おうと思います。その供犠の補佐役を務めて下さい。」

そして、ヨーガ行者は、沈黙して屍鬼を連れて来るようにと王を派遣しました。すると、屍鬼は王に話させるための手段を講じました^{三三〇}。王が話すと、屍鬼は再び帰ってしまいます。このように、二十五回、行ったり

来たりしても、王は落胆しませんでした。

それを見て、屍鬼は満足し、王に八つの偉大な呪力を授けました。王は「呼ばれたら私のもとへ来て下さい」と言つて望みの物を乞いました。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座することができます。」

第三十二話

再び小像が言いました。

「王様、お聞き下さい。」

ヴィクラマ王の勇敢さは、人助けのためには自分の身体さえも顧みないという、このようなものでした^{三四}。彼は剣によつて大地を治めました。その勇敢さを十分に称えることができましょうか。

その度量の大きさはユディシュティラのようでした。彼は、あらゆる場所に自身の暦を定着させました^{三五}。全大地を苦しみから解放し、苦悩と貧困には別の場所を与えました。

小像は言いました。

「王様、このように度量の大きい者ならば、この玉座に座することができます。」

結び

以上のように、三十二の小像が別々に物語を語りました。

そして、小像たちが揃って言いました。

「王様、どうしてヴィクラマ王を十分に称えることができませんか。あなたも普通の方ではなく、神々の分身です。次のように言われています——

インドラからは王権、アグニ^{三六}からは輝き、ヤマからは怒り、クベーラ^{三七}からは財産、ラーマからは勇敢さ、ヴィシユヌ^{三八}からは堅固さを得て、王の身体が作られる。^{（十七）}

したがって、王の身体は神々の分身です。あなたのおかげで、私たちは呪いから解放されました。」

すると、ボージャ王は尋ねました。

「あなた方は誰ですか。誰に呪われたのですか。」

小像たちは答えました。

「ボージャ王よ、私たちはみなパールヴァティーのお付きの者です。ある時、尊いシヴァ^{三九}はパールヴァティーと^{四〇}愛を交わした後、その近くに座りました。

私たちが心の中でシヴァを求めていたところ、パールヴァティー^{四一}にそれを知られてしまいました。「お前たちは、生命のない小像になるだろう」と言つて彼女は私たちを呪つたのですが、その後で、憐れみをかけて言いました。

「人間界において、お前たちは言葉を話すだろう。そして、ヴィクラマ王の行跡をボージャ王の前で語れば、呪いから解放されるだろう。」

そして、あなたのおかげで呪いから解放されたのです。今、私たちは、あなたに満足しています。王様、望みの物を選び取つて下さい。」

ボージャ王は答えました。

「私にはいかなる物に対しても欲望がありません。」

すると、小像たちが言いました。

「誰であれ、心と知性を傾けてこの小さな物語を聞く者は、王権、勇敢さ、威厳、輝き、幸運、息子、孫、

名声、勝利などを手に入れるでしょう。」

このように言って望みの物を与えると、小像たちは沈黙しました。

そして、ボージャ王は、その玉座にパールヴァティー^四とシヴァの像を安置して大祭を行った後、幸せに王国を治めました。

『玉座の三十二話』終わり

(本研究はJSPS 科研費 19K12953 の助成を受けたものです)

【参考文献】

Edgerton, Franklin

1926a *Vikrama's Adventure or The Thirty-two Tales of the Throne Part 1*. Harvard Oriental Series, vol.26.

Cambridge: Harvard University Press. (Reprint. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers, 1993.)

1926b *Vikrama's Adventure or The Thirty-two Tales of the Throne Part 2*. Harvard Oriental Series, vol.27.

Cambridge: Harvard University Press. (Reprint. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers, 1993.)

Haksar, A. N. D.

1998 *Siṃhāsana Dvātrīṃśikā: Thirty-two Tales of the Throne of Vikramaditya*. New Delhi: Penguin Books.

Mani, Vettam

1975 *Purāṇic Encyclopaedia*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Sternbach, Ludwik

1974 *The Kāvya-ports in the Kathā-literature (Pañcatantra, Hitopadeśa, Vikramacarita, Veṇīkapañcaviṃśatikā, Mādhavānala-kāmakandalā-kathā and Śukasaptati)* : an analysis. Delhi: Meharchand Lachmandas.

Törzsök, Judit

2007 "Friendly Advice" by Nārāyaṇa & "King Vikrama's Adventures." The Clay Sanskrit Library. New York: New York University Press JJC Foundation.

上村勝彦

一九七八 『屍鬼二十五話―インド伝奇集』（東洋文庫三三三）平凡社。

二〇〇三 『インド神話―マハーバーラタの神々』ちくま学芸文庫。

中村了昭

二〇一二 『新訳ラーマヤナ（1）』（東洋文庫八二〇）平凡社。

堀田和義

二〇一九 「ヴィクラマ王の冒険―*Vikramacarita* 簡略版 訳注（二）―」『川崎大師教学研究所紀要』第四号、
一〇五〇頁。

一 他の版と簡略版の章立ての対応関係については、Edgerton 1926a, p. xxxv を参照。

二 *Vikramacarita* の詩節は、他の様々なテキストにも見られるものが多い。それらの対応関係に関しては、Siembach 1974, p. 257 以下の ANNEX II を参照。

三 Törzsök 2007 が指摘するように、このあたりは問題が多く、Edgerton 1926a もクエスチョンマークを付している。Edgerton 1926a は *gita* を歌に限定するが、Törzsök 2007 は *samgita* の意味で理解し、「歌と踊りに関する論書 (treatises on song and dance)」と訳している。また、*anṛga* という語に関しては、Edgerton 1926a, Törzsök 2007 に従って「身体」と解釈したが、「音楽書（音楽学）の必須要件を具現している」などという訳も可能と思われる。

四 Brahmanī, Vaiṣṇavī, Mahēśvarī, Kaumārī, Vārahī, Indrāṇī, Cāmūṇḍī という七柱の女神を指す。これらの起源に関する様々な説に関しては Mani 1975, p.691 を参照。

五 偉大なる自在神 (mahēśvara)。

六 偉大なる自在神 (mahēśvara)。

七 Edgerton 1926a は、第二解釈として「敵の王国 (hostile country)」という解釈を挙げる。

八 八の直前に「望みの物 (vara) を選び取りなさい」などの台詞があるべきであるが、この部分には欠けている。

九 原語の *paduka* (木靴、サンダル) を、Edgerton 1926a は *sandals* と解し、Törzsök 2007 は *magic sandals* と解する。普通の靴であれば、わざわざ「靴を履く」ということを述べるのは不自然であると考え、ここでは Törzsök 2007 の解釈に従った。

一〇 Edgerton 1926a は「[王が] 太陽に別れを告げた (having taken leave of sun)」Törzsök 2007 は「太陽が王に別れを告げた (he bade farewell to the king)」と解するが、原語の *surjānjñāta* というのは、厳密には「[王が太陽に別れを告げて] 太陽がそれを受け入れた」ということである。

二 Edgerton 1926a は「興味深い景色に満足して (being satiated with interesting sights)」と解するが、ここでは従わなかった。

三 パーターラ界 (*patāla*)。十四ある世界のひとつ。

三三 Törzsök 2007 の解釈に従った。Edgerton 1926a は「道にとぐろを巻いた蛇たちが横たわっている (coils of serpents lie in the way)」と解する。

一四 原語は *śamavyayaphala* であり、Edgerton 1926a は「破壊を暗示するもの (those which imply destruction)」と解するが、Törzsök 2007 も指摘するように、この解釈は誤りであろう。

一五 簡略版には、棒状の魔法の剣の力に関する説明がない。Edgerton がオリジナル版に最も近いと考える南方版では、白墨 (*ghṛitika*)、魔法の杖 (*yogadanda*)、衣 (*kanthā*) の三つとなっており、それぞれの力は、以下のように説明される。

白墨……地面に線を引いたら、その範囲を一日で移動することができる。

魔法の杖……右手に持つて触れれば、倒れた軍隊が息を吹き返して立ち上がり、左手に持つて敵の軍隊に触れれば、敵の軍隊が全滅する。

衣……望みの物を与えてくれる。

一六 ヴィクラマ王がピータスターナへ進軍したというエピソードは、*Vikramacarita* 簡略版の第四章に見られる。該当箇所の和訳は、堀田二〇一九、一四頁を参照。

一七 アナンタなどとも呼ばれる。ナーガ族の王で、千の頭を持つ。パーターラ界に住むとされ、しばしばヴィシュヌの寝台としても描かれる。

一八 シエーシヤと同様、ナーガ族の王で、パーターラ界に住むとされる。『マハーバータ』一、十五〜十七によれば、太古にメール山に集まった神々が、不死になるための甘露を得るため、亀の王アクーパーラに攪拌棒としてのマンダラ山をのせてヴァースキを巻き付け、アスラの群れとともにその両端を引っ張って大海を攪拌したという。このエピソードに関しては、上村二〇〇三、八〇頁以下を参照。同様のエピソードは、『ラーマヤナ』一、四五にも見られる。該当箇所の和訳は、中村二〇二二、二〇九頁以下を参照。

一九 ダブルミーニングとなっており、浮世 (*saṃsāra*) は、もとより中身の無いものである (*asāraśāra*) が、言葉の上では中身の満ちたものである (*śaśanmucaya*)、すなわち、*saṃsāra* という語の前綴りである *saṃ* を *saṃmucaya* の意味に解することによる言葉遊びと解釈した。二つの解釈は、Törzsök 2007, p. 708 のものとは若干異なる。

二〇 太陽の息子 (*raviputra*)。

二一 蜂蜜をもたらす者、春 (*mādhava*)。

二二 ヴアルナは水の神であり、インドラは雨を降らせる神であるとされる。

二三 肉を食らう者 (*kravyāda*)。Törzsök 2007 は scavenger (ハイエナのような腐食動物) と解し、Edgerton 1926a も ravenous demon [or: wild beast] というように、第二解釈として肉食の野生動物の可能性を示す。

二四 以上の九つはいずれも博打のためのゲームの種類と考えられるが、詳細は不明。Edgerton 1926a は、順に、

sāriphala (a kind of chess), soṭkaṇṭha (不明), caturāṇga (four-membered [another sort of chess]), kapardaka (cowrie-shells), uccalīmaṣṭi (raised fist), gaṭāgata (backward-and-forward), daśacatuṣka (ten-times-four), ciraṇya (不明), dhūlikā (powder?) ところが訳語 (おっけは説明) を当てる。一方 Törzsök 2007 は「順に」 sāriphala (chess), soṭkaṇṭha (Play-With-Desire), caturāṇga (Four-Man-Playing), kapardaka (Cowrie-Shells), uccalīmaṣṭi (Fists-Up), gaṭāgata (Going-And-Coming), daśacatuṣka (Ten-By-Four), ciraṇya (Rugs), dhūlikā (Dust) ところが訳語を消して「^{二五} 先行研究でも指摘されているように、avakāla ところが語の意味は明確でない。ところが Edgerton 1926a, Törzsök 2007 の解釈に従った。

^{二六} abhetayitva という動詞の意味は不明。Edgerton 1926a は「博打打ちに幸運を授けつ」(having given the gambler good luck) と解するが、^{二七} ところが Törzsök 2007 の解釈に従った。

^{二七} 原語の soṇiāpura は「血の町」という意味。

^{二八} 原語の māṇsapriya は「肉を好む女〔神〕」という意味。

^{二九} 原語の turyavādyā を Törzsök 2007 は「drumming, playing music」というように並列複合語で解しているようであるが、格限定複合語で解する Edgerton 1926a に従った。

^{三〇} 注九を参照。

^{三一} 宇宙の主 (viśvanātha)。

^{三二} 原語の naramohini は「男を迷わせる女性」という意味。

^{三三} 上の部分は *Velāpañcaviṇśatīkā* に言及していると考えられ、*Vikramacarita* 簡略版の第三章にもこの場面への言及が見られる。*Velāpañcaviṇśatīkā* の和訳は「上村一九七八を」第三章の該当部分の和訳は「堀田二〇一九、一二頁を参照。

^{三四} Edgerton 1926a は「ヴィクラマ王の勇敢さは、以上のようなものでした。人助けのためには自分の身体さえも顧みませんでした (Such was the courage of Vikramāditya. To serve others he did not spare even his own body)」というように「*idisa* という語が、これまで語られた三十二話の内容を指すと解するが、^{三五} ところが Törzsök 2007 と同様に、「人助けのためには自分の身体も顧みない」という文を指すと解釈した。

三五 Edgerton 1926a は、saka を “his power” と訳すが、Törzsök 2007 が指摘するように、受け入れがたい。こ
では、いわゆるヴィクラマ暦を広めたというエピソードとして解釈した。

三六 燃え上がっているもの (ivalana)。

三七 ヴィシュラヴァスの息子 (vaisravana)。

三八 人々をかき乱す者 (janardana)。

三九 アンダカを滅ぼす者 (andhakantaka)。

四〇 Edgerton 1926a は、パールヴァティーではなく、小像たちと愛を交わしたと解するが、その後の「心の中
で」シヴァを求めた点などから、Törzsök 2007 に従って、パールヴァティーと解釈した。

四一 存在をもたらず者 (bhavanī)。

四二 輝かしい者 (gaurī)。

〈キーワード〉『獅子座三十二話』、インド説話、*Simhāsana dvātrīṃśikā*